歴史よもやま話　その 25

江戸無血開城と幕末の三舟

戊辰戦争において、「江戸無血開城」が行われたことは大方の人が知っている。このとき徳川幕府方として裏方も含め活躍したのが「幕末の三舟」である。

徳川家臣団のうち、その居士号に「舟」と付いた三人を「三舟」と言った。勝海舟、山岡鉄舟、高橋泥舟である。

有栖川宮熾仁親王を東征大総督、西郷隆盛を参謀とする東征軍が江戸に迫りつつあり、駿府（現在の静岡市）に総督府を設営中。上野寛永寺に謹慎中の徳川慶喜は護衛隊長の**高橋泥舟**に駿府に赴いて恭順の意を伝えてほしいと述べる。

泥舟は慶喜護衛の任にあり、側を離れることに不安を感じて、精鋭隊長で義弟の**山岡鉄舟**を推薦した。鉄舟は駿府に赴くことになったが、西郷を知っておらず、事前に情報を得るべく陸軍総裁の**勝海舟**を訪ねた。鉄舟とは初対面であったが、鉄舟の人物を大いに評価、西郷への書状を認めると同時に自宅に保護中だった薩摩藩士・益満休之助を護衛につけて送り出した。

駿府に着いた鉄舟は総督府に西郷を訪ねる前に、**清水次郎長が助力した**という説がある。広沢虎造のご存じ「旅行けば駿河の国に茶の香り、名代なるかな東海道・・」と名調子で始まる浪曲・清水次郎長伝の主人公である。大政小政、森の石松などを子分とした大親分次郎長の生業は回船業であるが、富士の裾野に茶畑を開墾するなど事業家でもあった。

山岡鉄舟と会談した西郷隆盛は、「徳川慶喜の身柄を備前藩に預けること、江戸城を明渡し、軍艦や武器をすべて引渡すこと、家臣団はすべて向島に謹慎すること」など 7 箇条を提示した。山岡は慶喜身柄の条項を除いてすべて受入れることを表明、田町・薩摩藩屋敷における西郷・勝会談に導き、江戸無血開城への道を開くべくお膳立てをしたのである。

三舟のうち、勝海舟が最も有名でその事績や逸話について大方の人が知っている。残り二人はどうだろうか。高橋泥舟は自得院流槍術の家に生まれ、長じて槍の名手となり、徳川慶喜が上野寛永寺に謹慎したとき護衛頭として仕えた。慶喜から厚い信頼を得、東征大総督に恭順を伝える使者を命じられるも、忠心厚い泥舟は、政情不安定な江戸において慶喜の側を離れることに偲びず、代わりに義弟（泥舟の妹婿）の山岡鉄舟を推薦したのである。

山岡鉄舟は一刀正伝無刀流の開祖、明治維新後は県参事や県令を勤め、のち西郷隆盛のたっての依頼により明治天皇の侍従として 10 年間も仕えた。

閑話休題：東征軍大総督・有栖川宮熾仁親王は、井伊直弼が画策した公武合体で徳川家に降嫁を余儀なくされた皇女和宮の許嫁であった。悲恋の貴公子として後世伝えられる。